

【序章】

——定時点検報告。システム、オールグリーン。各種計器類に異常は見られず。空港上空の天候は、快晴。南南西の方角より一・五メートルの風。滑走路の状態も良好です。

——現在、三番滑走路で離陸準備中の機体にて乗客トラブル対応中。およそ二十分ほど出発が遅れる見込み。十五分後に離陸予定の機体は、二番滑走路に回します。

所狭しと並べられたモニターや計器類から忙しなく吐き出され続ける情報の奔流を捌き、パイロットへの確に指示を出す管制官たちの冷静な声音が支配する管制室に、簡潔な報告が響く。「全て了解^{コピーオール}。各自、引き続き業務に当たれ」

——今日も今日とて、平和なようだ。無論、大勢の人の命を預かる仕事である以上、平穩無事に日々が過ぎるに越したことはない。だが、人というものは得がたい「幸運」でさえこうも淡々と続くと、その有り難みを容易く忘れられてしまうものらしい。こうしてまた同じような明日が来て、変哲もなく過ぎ去っていくのだろうな——。部下からの報告に半ば機械的に対応しながら、男の意識は取り留めのない思考に絡め取られようとしていた。

瞬間。ばざり、という「何か」に突然ひびが入ったような不吉な音が男の鼓膜に鋭く爪を立て、沈みかけていた意識が荒々しく現実に取り戻される。

一瞬、管制室の窓ガラスに何かあったのかと思慌てて目を遣ったものの、まるで強い衝撃に耐えるかのようにびりびりと軋んでこそいても、何処にもひび割れたような様子などは確認できない。だが、その瞬間も確実に、男の耳は先ほどのものとはやや毛色の異なる不快な音を捉え続けており、そしてその響きは、何かに入ったひびが着実に広がりつつあることを、聞く者全てにまざまざと伝えていた。

「——っ！ おい、この音は何だ。各員、各部署に状況を確認して報告しろ！」

咄嗟に、目に見えて動揺している部下たちに渴を飛ばす。予兆もなく突如として発生した「異常事態」にも、思いのほか取り乱すことなく対処できたのは年の功というものだろうか。上官の落ち着き払った様子にだいぶ冷静さを取り戻した管制官たちは、口々に『了解』^{コピー}とだけ応答すると、背筋に冷たいものが走るような不穏な音が断続的に響く中、一斉に通信を開始する。

数分もすれば、異音の「正体」も判明するだろう。もし我々の手に負えないようならば、外部に応援を要請すれば良い。とにかく種さえ割れてしまえば、後はどうとでもなるはずだ——。自身も状況の把握に努めながら、男は脳内で解決までの段取りと方針を迅速に組み上げていく。

だが、おおよその算段がついた直後、いよいよ何かの限界を迎えたのか、酷く硬質な物質が勢い良く砕け散ったような衝撃が、耳を劈^{つんざ}くようにけたたましい轟音と共に男の全身を貫いたかと思うと、到底立ってなどいられないような恐ろしく激しい揺れが、管制塔に襲い掛かった。

つい数秒前まで統制の取れた言語と会話の飛び交っていた室内が、一瞬にして無秩序な雑音と悲

鳴で染め上げられる。すぐに壁や天井にしっかりと固定されていたはずの機器や照明が崩れ落ち、床に激しく打ち付けられる耳障りな騒音や、いよいよ堪えきれず無残にも砕け散った窓ガラスが上げる断末魔の叫びが重なり始めると、室内を彩る混沌にもより深い絶望の色が増していく。

やがて数十分にも数時間にも感じられる、悪夢のような数分間が過ぎ去ると、弱々しい呻き声や恐怖に啜り泣く声がいやに五月蠅く感じられるほど、室内は重苦しく張り詰めた静寂で満たされていた。

「……くそっ！ 次から次に、一体何だって言うんだ……！ おい、全員無事か!? 安否を報告しろ！」

畳みかけるようにして襲い掛かってくる「非日常」の連続に、流石に今度も平静を装うことなどできず、咄嗟に潜り込んだデスクの下からふらふらと這い出ると、思わずがなるようにして周囲に呼びかける。

気が動転していて反応が遅れたのか、あるいは自身の状態の把握に努めていたのか、返事があるまでには幾許かの余白が生じたが、動揺の強く滲み出た一人の報告が呼び水となり、部屋のあちこちから自身の状況を伝える声が飛び交った。

幸いにも、大きな怪我を負った者はなかったようだ。多少の打ち身や切り傷などを訴える声も聞かれはしたものの、起きた出来事の規模を考えれば、その程度で済んでむしろ幸運だったと言えるだろう。

想像よりも軽微な被害状況に男はほっと胸を静かに撫で下ろすと、先程よりも幾分か落ち着いた調子で、事態の把握と原状の回復を行うよう部下に指示を出す。油の切れた機械のようにぎこちなく動き出した部下たちを尻目に、自身も素早く手元の端末を操作すると、おそらく現在の状況について懸命に報道しているだろう番組にチャンネルを合わせる。

『——緊急速報です。本日、十三時十一分頃、日本各地の非常に広い範囲において非常に強い揺れが発生しました。海岸沿いにお住まいの方は、落ち着いて身の安全を最優先に、万が一の場合に備えて指定の場所へと避難してください——』

映し出された画面の向こうでは、地味な色合いのスーツで身を固めたアナウンサーが、努めて冷静に聞こえるよう意識した口調で、周囲の安全確保と警戒を繰り返し呼びかけていた。

『——えー、ただいま新しい情報が入ってきました。震源地は……、えっ——』
新しく手渡された原稿に目を落とした途端、それまで淀みのなかったアナウンサーの声に、明らかな困惑と狼狽の色が混じり始める。

『——失礼しました。震源地は、えー「不明」または「存在しない」。地震の規模を示すマグニチュードは、えっと、マグニチュードは「計測できず」との、ことです。また、各地の震度計にも、一切の揺れが観測されていない模様、ですが、気象庁の発表では、一様に震度六弱から六強「相当」と推測されています。えー、これは誤報ではありません。繰り返し返します、これは誤報では——』
現実を伝えてくれるはずの番組から容赦なく突きつけられる非現実的な状況に、男は一瞬、言葉

を失ってしまう。もしかして日本は今、とんでもない事態に直面しているのではないのか——。背中に

じつとりとした嫌な汗が滲むのを感じながら、妙に確信めいた不穏な予感を振り払うように頭を振る男の鼓膜を、直に神経を逆撫するような音が激しく揺らした。

「っ、いい加減にしてくれ！ 今度はどうしたっ！」

男の悲鳴にも似た怒号が、鳴り響く音を掻き消さんばかりに室内を揺らす。

不快な音の「正体」は、航行中の旅客機から緊急信号が発せられたことを伝える警報音だった。その警報装置が作動したということは、つまり大勢の人命を乗せて空を駆ける船に何か重大な問題が発生したということにほかならない。航空管制官としての長いキャリアの中でも、片手で数えるほどしか耳にしたことはなかったものの、あの根源的な不安を煽り立てるためだけに生み出されたような音を聞き違えるはずがなかった。

男が苛立たしげに手元の端末を操作し警報を切ったのを見て、慌てて管制官の一人が緊迫した様子で問題の旅客機と交信を開始する。だが、次の瞬間には、室内は再びけたたましい警報音で塗り潰されてしまっていた。

「少し静かにしている……！」

ダンッ、と忌々しげに握りこぶしを叩き付けるようにして、男は舌打ちと共に警報を切った——はずなのだが、耳障りな音は止まらない。痲癩を起こしたように何度も繰り返しスイッチを切るのだが、やはり警報は一向に鳴り止む気配を見せなかった。

「くそっ！ こんな時に警報までイカれやがって！ 待つてろよ、整備部の連中に頼んですぐにその五月蠅い口を永遠に塞いでやるからな……！」

誰か手の空いている部下に整備部に連絡をさせようと、手元の端末からへばりつく意識を剥がして顔を上げた男の目に飛び込んできたのは、異様な緊迫感と喧噪に包まれた室内の様子だった。

鳴り響き続ける警報音のせいで互いに聞こえづらいのか、交信中の誰もが声を張り上げるようにしながら懸命に何かを伝えている。その表情も一様に険しく強張っており、何か途轍もなく良からぬ事態が進行していることを伝えるには、十分すぎる光景だった。

—— 一体、何が起きているというんだ。

嘩然とした様子で室内を見回していた男は、ふと視界の隅に「真っ赤に染まる何か」を捉え、おもむろに視線をそちらに向け——その瞬間、ようやく男は、自身が大きな「勘違い」を犯していたことに気が付いた。

警報装置は壊れていたのではない。ただ、装置を切ったそばから即座に作動していただけに過ぎなかったのだ。

男の見つめる先には、世界地図を表示する巨大なモニターがあったのだが、まるで酷い発疹を発症したかのように画面いっぱい広がる無数の赤い点が、不穏に明滅を繰り返しながらゆ

つくりと移動していた。

その点の一つ一つは、世界各国で航行している旅客機の位置や状態をリアルタイムに示すものであり、そして鈍く点滅する赤い光は、緊急信号が発されていることを示す。人の命を守るために削り上げられたはずのシステムは、今や見る者に深い絶望を与えるだけの邪悪なイルミネーションと化していた。

「そんな……。こんなことが、本当にありえるのか……？」

目の前に広がる質の悪い冗談めいた光景に、無意識に口から漏れ出た声が掠れる。極度の緊張のせいか、口の中はからからに乾ききっていたのだが、そのことに気付けるだけの余裕など、既に男には残されていなかった。

——報告します！ 航行中のJKY五〇二便より緊急信号を受信！ 現在、機体が速度を徐々に失いはじめ、高度低下に歯止めが掛からない模様！ なお、エンジンを含め、計器類は一切の異常を検出していないとのこと！

——PNL三一五便からも、同様の緊急信号が届いています！ また、無風状態の空域を航行しているにもかかわらず、数分前から強烈な乱気流の中を飛んでいるような機体の乱れに襲われているようです！

——ANJ八〇七便より緊急信号を受信！ 内容は、先二件と同様！ 現在、原因不明の高度低下と激しい機体の揺れが発生中とのこと！ 原因の推定と対策の提示を求めています！

直面する現実を上手く飲み込まず、ほとんど呆然と立ち尽くす男の耳に、旅客機の窮状を訴える切実な声が堰を切ったように押し寄せる。それは報告というより、もはや悲鳴に近かった。部下からの悲痛な呼び掛けに我に返ると、男は弾かれたように対応を指示し始める。

「とにかく、異常の原因を特定するのが最優先だ！ 各員、パイロットと連携を取り、緊急時プロトコルを三番から順にすべて実行しろ！ 非常事態につき、二番までは省略とする！」

雑然とした騒音の中でもよく通る男の指示を受けた管制官たちが、一斉に行動を開始する。その迷いのない動きとは裏腹に、男の胸中は拭いきれない不安に揺れ動いていた。

（下した指示は、脳髄にまで叩き込んだマニュアル通りの「完璧」な対応だったはず……。だが、そもそもこんな異常極まりない事態に際して、一体どこまでマニュアルが通用するのだろうか——）

止めどなく湧き上がる疑念を払拭しようと脳内で自問自答を繰り返すも、考えれば考えるほどかえって嫌な考えばかりが浮かんでくる。最悪の可能性が男の脳裏を掠めた瞬間、とにかく事態の把握に努めようと頭を切り替え、手元の端末に先程の報道特番を映し出した。

『——現在、都市部を中心に家屋および建造物の崩落や火災の発生が相次いでいる模様です。』

余震のおそれもありますので、損壊した建物からは速やかに退避し、最寄りの避難所まで避難してください——』

あれほどの強烈な揺れだ。やはり被害も相当なものとなりつつあるらしい。そう言えば、実家は大丈夫なのだろうか——。今更ながら田舎に残してきた両親の安否が気に掛かり、機械的に繰り返される定型的な報道を半ば聞き流していたはずの男の耳が、新たな異変を察知する。

『——なお、この地震による——は、現在までのところ確——ません。——も予想されますので、沿岸沿いにお住——は、引き続き津波には最大限の——てください——』
「何だ、地震の影響で電波でも乱れたか……？」

先刻よりもだいぶ落ち着きを取り戻したと見えるアナウンサーの低く落ち着いた声に、にわかにかに耳障りな雑音が混じり始める。見れば画面にはちらちらとノイズが走っており、端正な顔立ちをしているはずのアナウンサーの顔もゆらゆらと不規則に揺らめいていた。

『——続報です。現在、——の非常に広範な——で大規模な通信障害の発——れております。——原因——定と——の復旧——が各所で開始さ——ますが、影響——長期に——も予想——で、自治体の——や指示——従って——に——さい——』

強烈な地震の直後において、一時的に通信状態が悪化することは珍しいことではない。航空機との交信に支障が生じる可能性は憂慮すべきだが、管制塔の被災状況や航空通信の特性から言っても、そう易々と通信が断絶するような事態にはまずならないだろう。

だが、もはや意味のある単語を拾うことすら困難な有様に成り果てた報道を、呼吸さえ忘れて見つめる男の額には、どこか確信めいた脂汗が滲んでいた。

——何か、が、起、こ、る、。

それは何の根拠も理屈も存在しなければ、「勘」や「直感」と呼べるような天啓じみたものでもなかったが、じわじわと肌を逆撫でるように全身を這いずる生暖かい「異質さ」が、事態がこのまま終息に向かうはずのないことを男に宣告していた。

国の中枢に近い連中なら、現在の状況についてもっと詳しく把握しているかもしれない。脳裏に浮かんだ可能性に縋るように、あらゆる手段を用いて航空局本部に連絡を試みるのだが、不自然なほど一向に繋がる気配は見られなかった。

無意識に固唾を呑み込んだ拍子に、額に浮かんでいた汗が一粒、何かの均衡が崩れたかのように頬を伝って流れ落ちる。その擦くすくつたいような不快さを男が肌で感じたのと、焦燥感に満ちた表情の部下が再び喚わき始めたのとは、ほとんど同時のことだった。

——報告します！ 数分前より、航行中の機体との間に深刻な通信障害が進行中！ 現在はかろうじて交信が可能ですが、既に意思の疎通はほぼ不可能です！

——あり得ない。

——やはり、こうなったか。

相反するはずの感情が、男の脳内で瞬時に交錯する。だが、この僅かな間に腹が据わったのか、あるいは容赦ない絶望の連続に心が麻痺してしまったのかもしれない。いずれにせよ、三度もたらされた凶報にも、男が無様に取り乱すようなことはなかった。

「直ちに無線通信の出力を限界まで上げるよう、最優先で整備部に要請しろ！ それと緊急事態だ、軍用だろうが何だろうが構わん！ とにかく使える周波数は何でも使って、何としても交信を回復させろ！」

とうとう奥の手とも言える手段に打って出るよう命じる男の言葉に、管制官たちの不安に揺らぐ瞳に悲壮な覚悟の色が宿る。本当ならば、誰もが弱音の一つや二つも上げたかったことだろう。

だが、かつてない現実味を帯びた「何千何万もの命が懸かっている」という重責が鋭利な刃物の如き圧力となり、彼らにそれを許さなかった。壊れた機械のように繰り返し、だが決して機械ではあり得ないほど切実に応答を請願する声が、未だ鳴り止まぬサイレンの機械的な音を塗り潰す。

十分、いや五分。実際にはもっと短かったのかもしれない。勝ち目の薄い戦いに懸命に挑み続ける部下たちの後ろ姿を、半ば神に祈るような想いで見守っていた男の許に届いたのは、だが無情にも「信号途絶」を伝えるか細く震える声だった。

こんなことが、あつて良いと言うのだろうか。男は力なく椅子の上に崩れ落ち、だらりと天を仰ぐ。一言でも発してしまえば、脳裏に浮かぶ最悪の想像を現実にしてしまうことが分かっていたのだろうか、誰一人として口を開こうとする者はない。

ふと、部下たちの息を呑む気配を感じ、強い緊迫感に引っ張られるように男の顔が正面に向き直る。眼前に広がっていたのは、悄然とした表情で食い入るように巨大なモニターを見つめる部下たちの姿だった。

醜悪なイルミネーションの光が一つ、また一つと消えていく。まるで無邪気な子供が誕生日にローソクの火を吹き消すように呆気なく、理不尽に掻き消されていく夥しい命の灯。

サイレンの音ばかりが虚しく鳴り響く中、完全に光を失ったモニターの前に立ち尽くす男が、その光景の悍^{おぞ}ましさを正しく理解できるだけの理性を保っていなかったのは、いっそ幸運だったに違いない。

その日、世界各地で昼夜を問わず「流れ星」が観測された。

幸運にも遙か上空で酷^{むじ}たらしく四散することなく、不運にも「墜落」という無慈悲な形で、地

上への帰還が叶うこととなった。

——その日、世界は「空」を失った。